

論文

「エア友達」と話すという現実

——平坂読『僕は友達が少ない』論——

広瀬 正浩

1、問題提起

例えば、二体のフィギュアを、お互いが相手の顔を見つめているようにして置いてみる。そして、その二体をじっと眺めてみる。最初は何も起こらないかもしれない。しかし、しばらく眺め続けているうちに、「両者はおもむろに会話を始めるかもしれない。その事実には、あなたや私は驚くだろうか。もちろん、あくまで客観的な立場からその状況を説明するならば、両者の会話の成立を立証するどんな音声も生じていない、となるのだろうか。しかし、そのフィギュアとしての両者が、アニメやマンガの物語の中で因縁のある者同士——緑間真太郎と高尾和成や、佐倉杏子と美樹さやかなど——であれば、あなたや私の想像の中で、その物語に準じて会話する彼らの声が鳴り響くことになる。

では、その二体のフィギュアのうちの一つを、今度は自分の側を向くようにして置いてみる。そして、相手（フィギュア）の目を見つめてみる。最初は何も起こらないかもしれない。では、あなたや

私のほうから彼／彼女に向かって話しかけてみる。すると、相手もまた私たちに話しかけてくるかもしれない。相手に対する私たちの想いの分だけ、相手の声が聞こえてくる。

はたから見ると、このやりとりは、相当「痛い」ものに映るだろう。きわめて現実離れた様相を呈しているだろう。しかしそこでいう「現実」とは何か。その「現実」は全ての人々にとっての現実であると言い切れるのか。

本稿で取り上げる平坂読の小説『僕は友達が少ない』に登場する三日月夜空という女子高生は、物語の冒頭で、目に見えない相手＝「エア友達」と会話をしていた。彼女の経験は単に目に見えない相手に対するものであるばかりか（単に目に見えない相手と話すということであれば電話による会話もそうだから珍しくはない）、一般的な意味では「実在しない」相手に対するものである。それはおそらく、視覚的あるいは物質的には相手の存在を認めることのできるフィギュアとの会話以上にハードな経験だ。三日月夜空はどんな声を聞いているのだろうか。彼女が経験している現実はどうな質のものだろうか。これらの問題について考えることが、本稿の目的となる。一見、現実逃避的に見える態度の中に、現実の捉え方を相対化する可能性を探ることが、本稿の狙いである。

2、三日月夜空の論理

平坂読『僕は友達が少ない』はMF文庫から二〇〇九年よりシリーズ化した小説で、二〇一四年末現在、第一〇巻まで刊行している

(他にスピンのような作品もある)。ジャンルのには「ライトノベル」に属する。二〇一一年にTVアニメ化された。二〇一四年には実写映画化された。

物語の主人公(視点人物)は、高校二年生の「俺」こと羽瀬川小鷹だ。外見が中途半端に「ヤンキー」的であるため、周囲から浮いた存在であるが、「隣人部」という部に所属し、かわいい女子生徒たちに囲まれた「ハーレム」的状况に身を置いている。一人の男子生徒が複数の女子生徒に囲まれている状況というのは、ライトノベルや(それを原作とした)アニメなどで頻繁に見られるものであるが、その中でも『僕は友達が少ない』が特徴的であるのは、その「隣人部」という部の性質によると言えよう。隣人部は、「友達を作る」ためのスキルを高めるといって活動目的を置く部であった。その部の設立に先立ち、先に予告した「エア友達」をめぐるやりとりが展開することになる。

ある日の夕方、「俺」が廊下を一人で歩いていて自分の教室の前に辿り着いたとき、部屋の中から笑い声が聞こえてきた。それは「は、からかうなよー、そんなことないってー」という女性の声だった。「俺」はその声を「すごくいい声だ」と思った。「高くもなく低くもなく、耳の中へすうっと浸透したあと頭の中でゆっくり広がるような感じの美声」だと受け取ったのだ。しかしその一方で、「俺」は二つのことが気になった。一つはその声に聞き覚えがなかったということ、そしてもう一つは、「聞こえてくるのは一人分の声だけ」ということだった。だが後者については、携帯電話で友達と喋っているのだろうと想像した。

しかし、「俺」が目にした実際の風景は、奇妙なものだった。「すごくいい声」の持ち主はクラスメイトの三日月夜空だったが、その彼女の発話状況が、「俺」には呑み込みがたいものであった。

「あはは、だから違うって言うてるだろう。というかあの先生って、」

こんなふうには、まるでごく普通の女子高生みたいに明るい調子で喋っている彼女の姿を俺は見たことがなかった。

英語の授業でたまにあるペアでの会話練習の時も一人ムスツとした顔で椅子に座ったまま睨むように外を見ているだけ。英語の先生によれば彼女は一年生の頃からずっとあの調子で、先生も諦めているらしい。

他の授業で当てられたときも、今のようないし声色とはまるで別人のような、どんよりした陰気な声で淡々と正解を(勉強はよくできるらしく、答えを間違えたことは今のところ一度もなかった)述べる。

「ええ〜? ホントに〜? あはっ、だったら嬉しいなあ……」

普段はその整った顔を不機嫌そうな表情と態度で台無しにしている三日月だが、そのギャップも相まってこんな風に笑っている彼女は、その……めっちゃくちゃ可愛かった。

……本当に、彼女は三日月夜空なのか?

本気で疑問に思う。

と、そこでようやく、俺はさらに奇妙なことに気付いた。

……彼女は、携帯電話を持っていなかった。
教室には彼女一人しかいないし、声も彼女のものしか聞こえない。

誰もいない空間を見つめながら、まるでそこに誰かいるかのよう
に三日月は楽しげにお喋りをしていた。

夕暮れの教室で一人、見えざるモノと語る美少女⁹。

「夕暮れの教室で一人、見えざるモノと語る美少女」。それが、「俺」の見たものだった。「俺」は、それを見てしまったという自分の置かれた状況を、既知のもの（ここでは「図書館で読んでいたライトノベル」）に準えて理解しようとするのだが、うまく理解することはできなかった。そこで「俺」は、三日月夜空に声を掛けるのである。三日月夜空は最初、「俺」に対して警戒していた。「俺」に対して「……なんだ」と応える彼女の声は、「先ほどまでとはうって変わった、やたら低くてドスのきいた敵意全開のものだった¹⁰」。しかし「俺」が「いや、でもさっきまで誰かと話して……¹¹」と問いただそうとすると、夜空は急に顔を赤らめ、それから開き直ったように堂々と、「私は友達と話していただけだ。エア友達と¹²」と回答したのである。そして、答えを得てもなお理解に到達できない「俺」に、「……言葉通りの存在だ。エアギターというのがあるだろう。その友達版だ¹³」という解説を添えるのだった。彼女は、一般的にいつて実在しているとは言い難い、見えない存在を相手に会話をしていたのだ。その見えない相手のことを、「エア友達」と説明したのである。ちなみにその「エア友達」には「トモちゃん」という呼び名があった。

しかし、なぜ「エア友達」なるものと会話をする必要があったのか。その点について、三日月夜空は自ら説明している。

「……そもそも、私はどうしても友達欲しいわけじゃない」「え？」

「……友達がないことがイヤなのではなく、学校とかで『あいつは友達がない寂しいやつだ』と蔑むような目で見られることがイヤなのだ」

「あー、なるほど」

なんとなくわかる。

「友達がいること〓いいこと」というのは基本的にその通りだ
と思うけど、それが世間では『友達がないこと〓悪いこと』
と同義のようになってる。

それはちよつと違うんじゃないかと俺は思う。

「私は一人でも平気だ。学校での友人関係なんて上っ面だけの付き合いで十分だ」

三日月の声には、どこか無理が感じられた気がした。

「……上っ面だけの友人関係なんて虚しい気もするけどな」
すると皮肉っぽく三日月は口の端を吊り上げた。

「みんな大体そんなものだろう？ 上辺だけじゃない真実の友情で結ばれた友達同士なんて、世の中にどれだけいることやら」「……」

転校と同時に友達と縁が切れてしまった俺には、彼女の言葉を否定できない。

「……それでも、俺は本当の友達に巡り会いたいと思うけどな」
「ふうん」

俺の言葉に、三日月はどうでもよさげな相づちを打った。¹⁴

右のやりとりにおける、三日月夜空の発言内容を整理しよう。まず夜空には「友達がいない」。しかし、「友達がいない」という状況を嫌がっているわけではない。彼女が嫌がっているのは、「友達がいない」という状況に対する周囲の人間の評価の仕方だ。「学校とか」といった夜空が属する現実社会においては、「友達がいない」ことは「寂しい」ことであり、蔑視の対象である。「友達」の価値をめぐらした状況が、夜空と「エア友達」との会話成立の背景にあるという。

しかし、誰もがうすうす気付くことではあるが、「エア友達」と会話する三日月夜空の考え方や態度には、幾つかの問題点がある。

学校で「あいつは友達がいない寂しいやつだ」と思われたくないから「トモちゃん」という「友達」（エア友達ではあるが）を作ったとしても、その「友達」とのやりとりを一般生徒の前で行っているわけではないので、夜空に「友達」がいるということを、誰も確認できない。したがって、「あいつは友達がいない寂しいやつだ」という蔑みの目で周囲から見られる可能性を、夜空は排除できない。その意味で、夜空の対応は、「友達がいないこと＝悪いこと」という定義に信憑性を与えている「世間」に対して、何の批評性も持ち得ない。というよりも、そもそも、「友達がいないこと＝悪いこと」という定義に対抗しようとして「友達」を作っているのであ

れば、結局は夜空は「世間」に迎合しようとしているに過ぎないことになる。「世間」へのすり寄りだ。もし仮に、「エア友達」を作る夜空の態度に戦略的な意義を認めるならば、「エア友達」を作ることによって、夜空は「学校での友人関係」として「上っ面だけの付き合い合い」というものを極限化してみせて、「友達がいないこと＝悪いこと」とする「世間」を脱臼させようとしたのだ、と読解することができるかもしれない。しかし、そのようなアイロニカルな態度による高適な（？）批評意識が夜空の中にあるならば、なぜ夜空は、「エア友達」との会話を「俺」に見られて赤面したのだろうか。

結局のところ、「エア友達」と会話をしながら、「友達」をめぐら「世間」の風潮を批判する三日月夜空の言動は、ちぐはぐなのである。そのちぐはぐさが、『僕は友達が少ない』という小説の中の夜空の立場を「残念系ヒロイン」にしまっているのである。¹⁵

3、「繋がり」を強く求める空気

確かに、三日月夜空には「残念」などところがある。しかし、なぜ夜空は「エア友達」というものを作る必要に迫られたのか。前節で確認しているように、三日月夜空は、「……友達がいないことがイヤなのではなく、学校とかで『あいつは友達がいない寂しいやつだ』と蔑むような目で見られることがイヤなのだ」と述べていた。この発言は、「エア友達」と会話をしていた場面を「俺」に見られてしまった夜空の、¹⁶バツの悪さに¹⁷抱えるものではあるだろうが、「学校」という場における「友達がいないこと」の問題性は、『僕は友達が少

ない』の物語世界のみならず、読者である私たちが属する現実の世界においても見られるものだ。今日SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）などの登場によって社会問題化している、「繋がり」を求めなければならないという強迫観念を、私たちは、程度の差がそれぞれにあるとは言え、抱いている。三日月夜空の置かれている状況と私たちが置かれている状況は、きわめて似ている。夜空が抱える問題は、私たちにとっても無関係ではない。

誰ともつるむことなく、独りであることを、「一匹狼」という語を通じて理想化する価値観が、私たちの過去の時代においては社会的に共有されていた。集団に対して超然として「孤高」の存在は格好いいものだという価値観は、かつては存在していた。しかし今日、そのような個人のあり方は、「ぼっち」「コミュ障」などといった言葉によって、忌避されるものとして考えられている¹⁶。なぜ今は、集団のほうが価値のある時代なのか。その集団とはどのような質のものなのか。

近代日本においては、欧米の大国に対抗するための富国強兵政策や戦争などを通じて、国家全体・国民全体に共有される価値観や社会規範（Ⅱ「大きな物語」）が確立していた。例えば、明治時代の青年たちにとって「立身出世」は、そうした規範の一つとして存在していた。一九四五年の敗戦後も、「戦後復興」という目標が国民全体に共有されていた。……もちろん、いつの時代にも「例外」は存在する。「国民」全体の価値観・社会規範として共有されているものを共有することのできないような立場の者たちは存在していた。彼らは「国民」への同化を強制され、それが叶わない者たちは「国

民」から排除された。そうした弱者・少数者の歴史は、もちろん顧みられなければならない。

さて、しかしながら現代において、価値観の多様化や社会の流動化に伴い、国民の全員が等しく共有する価値観や社会規範は確立しづらいものとなってきた（Ⅱ「大きな物語」の終焉）。そうになると、個々人の「がんばり」（そのがんばりによってもたらされる自分自身の価値や存在意義）を承認してくれるはずの「社会的な尺度」が手に入りにくくなる。自らの承認願望が満たされる条件は社会の中にあらかじめ用意されているわけではなく、自ら求めなければならぬ。したがって、人々は自分の価値を認めてくれる相手を、身近な人間関係や、趣味などを共有する集団（クラスター）の中から見つけようとする。自らを定位してくれる尺度として、人との「繋がり」を求めるようになるのである。

こうして「繋がり」が求められるようになると、何かの目的のために誰かと繋がるのではなく、誰かと繋がること自体が目的化するようになる。このことを、社会学者の北田暁大は「繋がり性の社会性¹⁷」という言葉で説明している。しかし、他人と繋がるのが目的化していくと、繋がるのが当たり前となり、その結果、「誰かと繋がらなければならぬ」という強迫観念が人々によって内面化されることになっていく。こうした状況が、SNSなどの普及による「いつでも誰かと繋がれる」という人間関係の「常時接続化」によって、常態化していく。

社会学者の土井隆義は『つながりを煽られる子どもたち¹⁸』の中で、価値観が多様化し人間関係が自由化した現代の日本人のコミュ

ニケーションにおいては、「相互に異なった価値観で調整しあうために、かつて以上に高いコミュニケーションが要求されるようになり」^⑱、そのコミュニケーション能力が「ただ一つの共通の評価基準」^⑲となつて指摘することゝなり。とりわけ現代の日本において「学校」という空間は、そのようなコミュニケーション能力を子どもたちに獲得させることを強いる空間となつてゐる。土井は言う。

今日の学校は、一人でいることが異様に目立ちやすい空間だからです。子どもたちの多くは、魅力の欠けた人間と見られはしないかと周囲の視線に怯え、その視線からわが身を守ろうと、イツメン（いつも一緒のメンバー）を防御壁として周囲に張り巡らせる努力を日々ひたすら続けています。それは、人間関係の維持がきわめて難しい学校という過酷な環境を、なんとか無事に生き抜いていくための知恵と工夫なのです。^⑳

「学校」における子どもたちの「繋がり」への希求が、「周囲の視線に怯え、その視線からわが身を守ろう」とするネガティブな動機に基づくものであるならば、「上辺だけじゃない真実の友情で結ばれた友達同士」というポジティブな関係に絶望し、「学校での友人関係なんて上っ面だけの付き合いで十分だ」と考える三日月夜空の現実認識は、土井が指摘するような現代の日本の「学校」の状況に即したものだと言えるだろう。

ただ、仮にそれが「上っ面だけの付き合い」であつたとしても、周囲からの承認を得て「繋がり」を求め続けることを自らに課すこ

とになつた子どもたちにとって、「学校での友人関係」は貴重な資源に他ならない。しかし、その資源そのものの根拠が脆弱であるため、子どもたちの過酷さは痛烈なものとなる。土井も別の箇所述べているのだが、「互いに仲良しであることの根拠は、互いにそう思っている感情の共有にしかない」^㉑ため、「互いの親密さをつねに確認しつづけないと、その関係を維持していくことが難しく」^㉒なつてゐるのだ。

そんな中、携帯電話やスマートフォンは、子どもたちが「互いの親密さをつねに確認」することを可能にするツールとなつてゐる。その意味では、これらメディアが、自らの承認願望を満たしたいと考える子どもたちをサポートしていると言えよう。だが、携帯電話やスマートフォンを使ったSNSによる常時接続のため、家庭においても学校での人間関係が継続してしまうことになる。そうなる、子どもたちにとって逃げ場はどこにもない。子どもたちが所有する全ての時間・空間が、学校での人間関係の全面化したものとなるのだ。「誰かと繋がらなければならない」という強迫観念はますます強いものとなり、子どもたちはますます追いつめられることになる。

本稿で取り上げている小説『僕は友達が少ない』は、こうした「繋がり」を求める強迫観念を、特に露骨に問題にしている点に特徴があるが、人との「繋がり」を重視するという物語というものは、現代日本のポップカルチャーにおいて量産され続けている。一例として、二〇一四年に様々な領域で多くの支持を得たTVアニメ『ラブライブ!』^㉓を見てみたい。

物語は、音ノ木坂学院の高校二年生・高坂穂乃果を中心に展開する。穂乃果は、幼馴染みの園田海未・南ことりと楽しい学校生活を送っていたが、そんな中、突然、廃校の危機を知る。「この学校好きなのに……」と思う穂乃果は、何とか学校をアピールして入学希望者を増やそうと考え、スクールアイドルを結成することを思い立つ。そんな穂乃果の前に立ちはだかったのが、生徒会長の絢瀬絵里だった。絵里は穂乃果たちのスクールアイドルとしての活動を認めず、学校のためではなく、自分のため²⁶の高校生活を送るよう穂乃果に進言する。しかし穂乃果は、もつともつと歌いたい、踊りたい、自分たちの「がんばり」を届けたい、と考える。そんな穂乃果の強い「がんばり」のもとに、学年を超えて仲間が集まり、「Jrs」(ミューズ)としての活動が始まる。

当初は穂乃果たちのアイドル活動は、「自分の居場所のため」「がんばる自分のため」のものであった。つまり、Ersという集団を結成しながらも、個々人がいかにしてそれぞれの自己表現を実践していくか、という点に主眼が置かれていた。²⁶しかし、Ersがグループアイドルとして活動を展開し、グループアイドルとしての評価を得ていくことにより、そうした目標のあり方は変化していく。彼女たちは仲間がいるからこそ自分というものを見つけ、仲間と共有する目標というものを持つことになる。一人一人の「がんばり」を支える「繋がりに」というものが求められるようになり、彼女たちの口から「みんなで叶える物語」(第二期第一〇話)という言葉が出てくるようになるのである。

話を『僕は友達が少ない』に戻そう。「学校」という場が「繋が

りを求めなければならぬ」という強迫観念の充満した空間となっている中、しかし三日月夜空は、教室での不特定多数との繋がりを求めることはなかった。それでも、人との「繋がりに」を全く断つてしまおうという意識もなかった。夜空は、「周囲から『友達のいな寂しい奴』という蔑みの視線を回避するための上辺だけの友達を作りつつ、小鷹の言う本当の友達を探すことも可能²⁷」であるような「隣人部」を創設し、「俺」を隣人部に所属させた。やがて、隣人部には「残念」な美少女たちが集まってくる。夜空は「繋がりに」を求めて積極的に行動したのである。

現代の子どもたちが自らの承認願望を満たすためにネットに依存するのに対し、『僕は友達が少ない』の三日月夜空たち隣人部は、徹底的に対面コミュニケーションにこだわった。彼らのコミュニケーションは、主に部室という物理的な空間において、身体を媒介として視覚的かつ触覚的に展開された。その結果、「俺」にとつては「ラッキースケベ」的な事件も起こったりした。こうしたコミュニケーションのあり方は、物語に起伏をもたらそうとする作品内の要請に基づくものであるだろうし、読者の願望に拠るものでもある。しかし、対面コミュニケーションが成立していることによつて、(非対面的であれば回避できたかもしれないはずの)衝突が不可避となる。実際、隣人部では、部内での様々なイベントのたびに三日月夜空と柏崎星奈が衝突していた。そもそも隣人部を創設しようとした夜空の動機には、夜空にとつて幼なじみであった小鷹(「俺」)とのかつての仲を取り戻すという意味も含まれていたはずで、その意味では、小鷹のことが好きな星奈は夜空にとつて邪魔な存在で

あった。しかも星奈は男子生徒から人気があり、いわゆる「リア充」的であるため、夜空にとって目障りであったはずだ。だがしかし、互いに全人格をぶつけ合う彼女たちの衝突は、相手に対して自分を隠すという意識の希薄さにより、自ずと相互理解に繋がっていくことになる。そして、夜空と星奈はお互いに相手のことを「友達」として認め合える関係になっていくのだ。夜空は、「繋がり」が求められる「学校」という空間において、いわば正攻法的な仕方では、現実を更新していったのである。その意味で、表向きの主人公は羽瀬川小鷹ではあるが、この『僕は友達が少ない』は三日月夜空の成長物語として読むこともできる。

しかし、「エア友達」と会話していた三日月夜空、というものは否定されなければならないものなのだろうか。見えない相手「トモちゃん」に向かって楽しげに会話する三日月夜空の経験の豊かさを評価する思考を構築することはできないだろうか。

4、「エア友達」の実在性

三日月夜空が「エア友達」と会話をしていた場面を、語り手である「俺」こと羽瀬川小鷹は、次のように捉えていた(語っていた)。「教室には彼女一人しかいないし、声も彼女のものしか聞こえない。／誰もいない空間を見つめながら、まるでそこに誰かいるかのように三日月は楽しげにお喋りをしていた⁽²⁾。しかし、一体、誰にとって「聞こえない」のか？

私たちにとって現実というものは、必ずしも、一面的にのみ捉え

られるべきものではない。例えば、ある外気を「暑い」と感じることもあれば、「寒い」と感じることもある。同じ現実に対して複数の判断基準が並存することは、さして珍しいことではない。複数の判断基準がそれぞれに支える、意味的にも葛藤し合う複数の言葉が、一つの出来事を、葛藤し合う複数の「現実」としてそれぞれに定位していく。そして、「暑い」と感じられる「現実」と「寒い」と感じられる「現実」が重なり合って、全体としての現実というものが構成されていく。このように複数の「現実」が重層化して現実が形成されるのであれば、そうした中から、見える／見えない、聞こえる／聞こえないという自らの知覚に対する分節化を徹底させないような現実認識というものが生み出されてもおかしくない。それこそが、現実の多層的なありように適応した現実認識であるはずだ。したがって、『僕は友達が少ない』の場合においても、三日月夜空が「トモちゃん」と会話をするとする出来事を一元的に理解しなければならぬはずはないのだが、「俺」による語りは、ただ一つの基準によって、「聞こえない」という「現実」だけを、現実として確定していく。『僕は友達が少ない』には次のような場面がある。

「つまりその場に友達がいると仮定して喋ってたってことか？

なんでまたそんな……」

俺が言うとき三日月は少しムキになったような口調で、

「仮定じゃない。トモちゃんは本当にいる。ほらここに」

エア友達とやらの名前はトモちゃんというらしい。

もちろん、俺にはトモちゃんの姿など見えなかった。

「トモちゃんとお喋りしているととても楽しくて、いつも時間が経つのを忘れてしまう。友達とは本当にいいものだな」

真顔で言う三日月だがその顔はちよつと赤い。

「さっきも中学生のときトモちゃんと二人で遊園地に行ったとき数人のグループにしつこくナンパされたのだがその中に新任のイケメン教師がいたという設定で話をして大いに盛り上げていたところだ」

「設定！ 今設定って言った！」

「言つてない。あれは本当にあつたことだ」

「……どこまでが本当にあつたことなんだ？」

「『中学生のとき』」

「ほぼ100%ねつ造じゃねえか！ せめて遊園地に行ったことくらいは事実であつてほしかった……！」⁽³⁰⁾

三日月夜空には、「トモちゃん」と会話する、という「現実」がある。しかし、夜空は「俺」に対して、自らが経験している「現実」について説明しきれない。「俺」による絶妙なツツコミによって、夜空によって語られる夜空自身の「現実」経験は、ツツコミどころ満載の妄想として確定されることになる。結果として三日月夜空の「現実」は、「俺」と夜空との間で認定されず、排斥されてしまう。「もちろん、俺にはトモちゃんの姿など見えなかった」という語りに含まれる「もちろん」という語は、説明することの必要性を読者に了解させ、夜空の「現実」の存在可能性を根こそぎ削り取るものとなっている。これが『僕は友達が少ない』の語りの政治というものだ。

では、「俺」と夜空のやりとりによって結果的に存在を否定されてしまった夜空の「現実」とは、実際にはどのようなものであつたのだろうか。改めて、本稿第二節の最初の引用を振り返りたい。

三日月夜空は「トモちゃん」に向かって「あはは、だから違うつて言つてるだろう。とかあかの先生つて」と発話している。また、夜空は「ええ？ ホントに？ あはつ、だったら嬉しいなあ……」とも発話している。これらの夜空の発話は、決して一方的なものではない。相手である「トモちゃん」の発言への応答の語りとして形成されている。この応答形式の語りというものは、いや応答形式に限らず「語り」というものは、数多の文学理論が教えてくれているように、聞き手なるものを想定して行われるものである⁽³¹⁾。その聞き手は、語り手に対して現前しているものばかりではない。多くの場合、語りの構えは、潜在的な聞き手に対して形成されている。その中でも応答形式の語りは、(顕在的あるいは潜在的な)聞き手の輪郭を、他の語りの形式以上に濃く強く縁取るものである。『僕は友達が少ない』の場合、その聞き手の発話に応じた夜空の反応が、聞き手に実在性を付与していく。「だから違うつて言つてるだろう」という夜空の発話は、夜空の「違う」という前言を真に受けずに夜空に発話する存在として、「トモちゃん」を立ち上げる。また、「ええ？ ホントに？ あはつ、だったら嬉しいなあ……」という夜空の発話は、夜空に思いがけず嬉しいことを語つてくれる存在として、「トモちゃん」を立ち上げる。

ところで、潜在的な聞き手が「潜在的」であるのは、あくまで語り手にとつての「現実」の水準において、である。もし、語り手に

とつての「現実」とは別の水準の「現実」の中へ、文字通り「潜つて」いけば、その聞き手は実在するものとしてあるのではないか。幾つもの「現実」が重層化した現実の中で、「トモちゃん」が実在する「現実」を選択すれば、「トモちゃん」は潜在的なものではなく、生々しく現前する存在として意識されよう。三日月夜空による応答形式の語りは、現実というものが多層的であることを露呈するものであった。夜空による「トモちゃん」への呼びかけは、幾つも重なった「現実」のどれかに対してコミットするものであった。

そして更に言えば、三日月夜空による応答形式の語りは、「トモちゃん」の声を聞くという仕方でも成り立っていた。このことも大きい。声というものは、その声の発信者の身体のイメージを、否応なく喚起する⁽²⁸⁾。夜空には聞こえているというその声は、「トモちゃん」の身体イメージと分かちがたく結びついている。夜空が「トモちゃん」の声を聞くというまさにそのことによって、「トモちゃん」の实在性は、より強化されていくことになるのだ。

5、まとめ

一見、現実逃避的に見える態度の中に、現実の捉え方を相対化する可能性を探ることを目指し、本稿では『僕は友達が少ない』の中の三日月夜空の「エア友達」との会話に注目した。夜空は、「学校とかで『あいつは友達がいなくて寂しいやつだ』と蔑むような目で見られる」という現実を正当化できず、他の人には見えないかもしれないが自分には見えるという「トモちゃん」という「エア友達」

を作り、会話を楽しんだ。確かにそれは現実逃避的というか、現実離れた態度であるかもしれない。しかし、他の人には見えないものが自分には見えるという現実、他の人には聞こえないものが自分には聞こえるという現実を出来させることで、現実というものを一元的に捉えようとする視点は相対化されることになる。三日月夜空の言動は、そんな可能性を孕んだものであったのだ。「繋がり」が強く求められる学校社会の中で、夜空は正攻法的に現状に適應していったが、現実というものが多層的に捉えられるのであれば、幾つかある「現実」のうちから、「繋がり」が強くは求められない「現実」を選択するという方法で、現実をしのげるかもしれない。

振り返ってみれば、現代の日本の文化的生産物の中には、現実が多層的に捉えようとする契機が多く含まれている。例えば、現実における不可思議な事象の背景に妖怪の存在を見ようとするゲーム／アニメ『妖怪ウォッチ』⁽²⁹⁾や、何気ない日常的な風景を剣と魔法の世界として幻視する「中二病」のヒーロー／ヒロインを扱った数多くのアニメ作品／ライトノベル作品など、枚挙に暇がない。現実を多層的に捉える視点が今日の様々な文化的生産物の中に用意されているということは、それほどまでに「現実を多層的に捉えたい」という人々の願望が確固としたものとして存在しているということなのだろうか。

『現実』という言葉で指示される事象の内実は、時代ともに変化していく。それに伴い、『現実逃避』とされるものに対する評価の仕方も、変化していく。現実が一元的たり得ないものであることが物語を通して求められている今、現実逃避に対するどのような語り

方が可能であるのか、引き続き模索していく必要があるだろう。あなたや私の前に立っているそのフィギュアが、あなたや私に向かつて語りかけてくるその瞬間を、静かに待ちながら。

注

- (1) 緑間真太郎と高尾和成は、二〇〇九年より『週刊少年ジャンプ』（集英社刊）で連載の始まった、藤巻忠俊のマンガ『黒子のバスケ』の登場人物である。両者とも、高校のバスケットボールの選手である。なお、連載は二〇一四年に終了した。
- (2) 佐倉杏子と美樹さやかは、二〇一一年に放送されたテレビアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』の登場人物である。両者とも、魔法少女である。なお、テレビ放送後、二〇一二年に劇場版前編「始まりの物語」、後編「永遠の物語」が上映され、二〇一三年に新編「叛逆の物語」が上映された。
- (3) アニメ『僕は友達が少ない』は、第一期が二〇一一年一〇月〜一二月にTBS系列で放送された。監督は斎藤久、脚本は浦畑達彦が担当した。アニメーション制作はAIC Build。第二期は『僕は友達が少ないNEXT』という題で、二〇一三年一月〜三月に放送された。このときは、喜多幡徹が監督を担当している。
- (4) 実写映画『僕は友達が少ない』は、及川拓郎が監督・脚本を担当し、瀬戸康史・北乃きい等が出演した。配給は東映。
- (5) 例えば、裕時悠示『俺の彼女と幼なじみが修羅場すぎる』（二〇一一年）、GA文庫の場合、季堂銳太という男子高校生の周りには、幼馴染みの春咲千和、（フェイクの）彼女である夏川真涼、自称「元カノ」の秋篠姫香、自称「婚約者」の冬海愛衣という四人の女の子が、季堂銳太のことを慕う形で配置されている。こうした「ハーレム」的な人物配置は、「ギャルゲー」などと呼ばれる恋愛シミュレーションゲームの構造と関係があるだろう。「ギャルゲー」とは、プレイヤーが男性主人公の視点から複数の女性登場人物を攻略するタイプのゲームだが、こうしたゲームを原作としたアニメやマンガも数多く生み出されている。ただ、物語における男女の構成比

- 率の問題（ジェンダー論的問題）は、それほど単純には論じられない。恋愛シミュレーションゲームの中には、プレイヤーが女性主人公の視点から複数の男性登場人物を攻略する「乙女ゲーム」もあるし、女性が「ギャルゲー」をプレイしたり、男性が「乙女ゲーム」をプレイすることもある。
- (6) 平坂読『僕は友達が少ない』第一巻、二〇〇九年、MF文庫、二六頁。
- (7) 同前、二六頁。
- (8) 同前、二六頁。
- (9) 同前、二七〜二八頁。
- (10) 同前、三〇頁。
- (11) 同前、三二頁。
- (12) 同前、三二頁。
- (13) 同前、三二頁。
- (14) 同前、四〇〜四一頁。
- (15) 洋泉社MOOK『オトナアニメ』Vol.27（二〇一三年二月、洋泉社）において特集「好き」が見つかるラブコメアニメ完全読本」が生まれ、アニメ『僕は友達が少ないNEXT』が紹介されたが、そこで「〇年代のラブコメで注目すべきは残念系ヒロイン！」（一六頁）として三日月夜空が取り上げられている。この作品の中には三日月夜空の他に、ルックスは抜群に良いのだがある部分には欠落している「残念」なヒロインが多数登場する。ちなみに、この「残念」という言葉は、さやわか『〇年代文化論』（二〇一四年、星海社）において、二〇一〇年代のキーワードとして説明されている。
- (16) 西尾維新『化物語（上）』（二〇〇六年、講談社）に登場する戦場ヶ原ひたぎは、学校の中でも「繋がり」を求めない存在である。語り手である阿良々木暦によれば、「学校というのは不思議な空間で、友達のない人間は友達のない人間同士で一種のコミュニティ（あるいはコロニー）を形成するのが普通だが（実際、去年までの僕がそうだ）、戦場ヶ原はそのルールからも例外であるようだった。勿論、かといって苛めにあっているということでもない。ディーブな意味でもライトな意味でも、戦場ヶ原が迫害されているとか、疎まれていたとか、そういったことは、僕の見限りのない」（二二頁）ということであるという。「僕が見限りの」というエクスキューズをどのように捉えれば良いのかという問題はあがるが、「ぼっち」であって

もそれを否定的なものとしてのみ描こうとする物語ばかりがあるわけではない、ということは言えるだろう。

- (17) 北田曉大『嗚う日本の「ナシヨナリズム」』二〇〇五年、日本放送出版協会、二〇六～二〇七頁。
- (18) 土井隆義『つながりを煽られる子どもたち ネット依存といじめ問題を考える』二〇一四年、岩波書店。
- (19) 同前、二九頁。
- (20) 同前、二九頁。
- (21) 同前、四一頁。
- (22) 同前、一三頁。
- (23) 同前、一三頁。
- (24) 波戸岡景太は『ラノベのなかの現代日本 ポップ／ぼっち／ノスタルジア』(二〇一三年、講談社)の中で、『僕は友達が少ない』を取り上げている。波戸岡は、この作品が従来のラノベと一線を画している点として、「主人公の悩みどころが、「誰と恋に落ちるか」ではなく、「誰もが傷つかずにいるにはどうすべきか」にあることに変わっている点だろう」(三八頁)と指摘している。
- (25) 『ラブライブ!』は、KADOKAWA、ランティス、サンライズの合同プロジェクトにより、音楽・アニメ・ゲームなどを通じて展開するコンテンツである。TVアニメは京極尚彦が監督を担当し、花田十輝がシリーズ構成と脚本を担当して、サンライズがアニメーション制作を担当し、TOKYO MXほか複数系列で放送された。第一期は二〇一三年一月～三月に放送され、第二期は二〇一四年四月～六月に放送された。第一期、第二期ともに全十三話の構成となっている。主題歌および挿入歌は、声優たちによって構成された「Ls」が担当している。二〇一五年には劇場版アニメの公開が予定されている。
- (26) アニメ『ラブライブ!』第一期放送のOP曲は、E.S.『僕らは今のなかで』(作詞・畑亜貴、二〇一三年)であるが、その歌詞は、個々人がそれぞれの目標に向かって頑張っていくことを称揚するものとなっている。
- (27) 平坂説『僕は友達が少ない』第一巻、五四頁。
- (28) さんざん罵倒し合ってきた三日月夜空と柏崎星奈であったが、『僕は友

達が少ない』第一〇巻(二〇一四年)において星奈が周囲の人間から嘲笑されたとき、星奈にとっては宿敵であったはずの夜空が星奈をかばう場面がある。その後、星奈は夜空に、「あんた、あたしと友達になりなさいよ!」(第一〇巻二三九頁)と告白する。それに対して夜空は、最初は少しとぼけたものの、「なにを頓珍漢なことを言っているのだ肉」、「だって私たちはもう……友達だろう」(第一〇巻二四〇頁)と笑みを浮かべて答えるのだ。ちなみに夜空の言葉の中にある「肉」とは、肉感的な身体をもつ柏崎星奈に対して三日月夜空が使う、ある種の蔑称である。しかし蔑称ではあるが、星奈はそれを受け入れている。

- (29) 平坂説『僕は友達が少ない』第一巻、二八頁。
- (30) 同前、三三頁。
- (31) 聞き手という存在に対して過剰なまでに意識的な語り手が登場する小説として有名なものが、宇野浩二『蔵の中』(一九一九年)であろう。
- (32) 声が発声者の身体イメージを喚起するという観点から、初音ミクや女性アナウンサーの身体を論じたものとして、拙著『戦後日本の聴覚文化 音楽・物語・身体』(二〇一三年、青弓社)がある。
- (33) 『妖怪ウォッチ』のゲームは、ニンテンドー3DS専用ソフトとして二〇一三年にレベルファイブから発売された(以降、続編が多数発売される)。TVアニメは、二〇一四年一月よりテレビ東京系列で放送されている。監督はウシロシンジ、アニメーション制作はOLMが担当している。